

令和 5 年 6 月 10 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00339

研究課題名(和文)大阪能楽会館蔵書解題目録の作成ならびに茂山千五郎家と青家のかかわり

研究課題名(英文) Compilation of the catalog of commentaries on the collection of the Osaka Nohgaku Kaikan and the relationship between the Shigeyama Sengoro family and the Ao family

研究代表者

関屋 俊彦 (SEKIYA, Toshihiko)

関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員

研究者番号：70125136

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：関西大学図書館には生田文庫といってアサヒビール創設に貢献した生田秀以来の古書が寄贈されていた。秀は大阪一の名人大西閑雪(大正5年没)に謡・仕舞を習っていた。御子孫の秀昭氏の御厚意で能楽関係の本を館所蔵に出来た。2016年12月24日に関西大学で催した能楽フォーラムに大西智久氏をお招きし、秀昭氏と共にお聞きする機会を得た。その前後から梅田の大阪能楽会館(2017年閉館)の本箱に長く眠っていた蔵書を調査出来、閑雪が亮太郎と共に大大阪と呼ばれた一時代を築いていたと確信された。大阪で唯一発行されていた能楽専門誌『國諷』は創刊号から閑雪と懇意であった泉泰知の編集になることまで確認し得たのは収穫であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大西家蔵書の中で特筆すべきは『拾果集』で宴曲といわれている中の新発見である。既に岡田三津子氏と『Memories of Osaka Institute of Technology』で報告しているし、インターネットでも公開した。大西閑雪は大曲 関寺小町 を生涯で三度も演じているので、その記録は貴重である。又、『國諷』では京都観世屋敷での謡初の折、世阿弥が將軍義満から拝領した槍とか糺河原勸進能の立て札が飾られていたという林喜右衛門の目撃談は小文とは言いながら初めて紹介された記述で学会でも知られていなかったことであろう。

研究成果の概要(英文)：The Kansai university Library has been donated to the Ikuta Bunko, old books from IKUTA Hiizu onwards, which were greatly involved in the founding of ASAHI Beer company. At that time, Syu was learning Utai and Shimai from Kansetsu, the master in Osaka. Thanks to the courtesy of his descendants, Mr. Hideaki, we were able to bring books related to the library. Invited MR. Ohnishi Tomohisa to the Noh Forum held at Kansai University on December 24, 2016, and had the opportunity to listen with Mr. Hideaki and after that, I was able to investigate the collection of books that had been dormant for a long time in the book case of the Osaka Nohgaku kaikan (closed in 2017) in Umeda, and I was convinced that Kansetsu and Ryoutarou built an era called Great Osaka. It was a harvest that I was able to confirm that 'KOKUFUU' which was the only one published in Osaka, was edited by IZUMI Yasutomo, who had a close relationship with Kansetsu, from the first issue.

研究分野：日本文学・中世文学・能楽

キーワード：能楽師大西家 大西閑雪 雑誌『國諷』 泉泰知(秋花) 京都観世屋敷 拾葉抄 能 西宮 大蔵 弥右衛門

【研究成果報告書】

1, 研究開始当初の背景

関西大学総合図書館に生田文庫がある。吹田市の大阪麦酒会社(大日本ビール、現在のアサヒビール)の創立時に大きくかかわった生田秀(明治39年逝去)と、その子息耕一(昭和8年逝去)によって収集されたもので、昭和23年に約1,600冊が遺族から寄贈された。のちに聞くと、関大文学科教授の金子又兵衛氏が近所のよしみで、お前のところにはたくさん本があるから蔵書数の足りない関大図書館に寄贈してもらえないかということで入ったものらしい。そうとも知らず学生だった私は基本図書にも恵まれている生田文庫をよく利用していた。その中に既に興味を抱いていた能楽の『四座役者目録』があることに気付いた。拙著『続狂言史の基礎的研究』(2015年3月・関西大学出版部)にも書いたことだが、秀の曾孫にあたる秀昭氏にお願いし、幸い関大図書館に小鼓以外、寄贈された。古稀を迎えた2016年度でもって、私が一旦、関大を去ることになるのを記念して、そのころには生田秀が大西家五世閑雪(かんせつ・前名鑑一郎・天保11年~大正5年)に謡を習い、有力な支援者であったことがわかっていたので、秀昭氏を梅田の大阪能楽会館にお連れし、大西家八世智久氏と初対面をしていただき、そのまま2016年12月24日に関西大学で行われた能楽フォーラム(能楽学会)での「この人に聞く」にお招きしたことであった。

一方で私は智久氏の御厚意で「蔵」と呼ばれていた二階の一角を占める本箱の中にあった蔵書を整理させてもらい始めていた。実は私は院生時代に伊藤正義先生のかかわりで大阪能楽観賞会のお手伝いをさせてもらっていたが、そのようなものがあるとは思ってもよらなかった。蔵書の一部の調査は早くは西畑実氏(昭和52年逝去)が「資料紹介 大西家蔵「番外謡本について」と題され『樟蔭国文学』に昭和45年3月号から7回にわたって翻刻を連載され、最近では大谷節子氏によって初代新右衛門が京観世五軒家のひとつである岩井家に入門したのをきっかけにして岩井直恒とのかかわりで一部調査されている程度であった。

2, 研究の目的

当初、「大阪能楽会館蔵書解題目録の作成」と題していたが、大阪能楽会館は閉館してしまったので「能楽師大西家蔵書解題目録の作成」と変更することになる。

能楽フォーラムを前にして智久氏から大阪能楽会館は2017年で以て閉館するというショックな話を伺った。会館は智久氏の父信久氏によって竹腰健造設計のもと舞台の目付柱を取り外せ自由な演劇空間が出来るようにし、又、二階席の客からも見やすいように席を湾曲させ収容人員は513名を誇り1959年3月に竣工された。それは戦前の閑雪の見所吹き曝しの博物場舞台の欠点を払拭させるものでもあった。残念なことにマスコミの反応は、たとえば『朝日新聞』4月25日付「大阪能楽会館 今年末で閉館」は舞台写真入りではあったが小さな記事であった。私の出来ることはせいぜいプロ写真家の今駒清則氏に隅々まで写真撮影してもらい、高校生の演劇に使ってもらうことを仲介した程度に過ぎなかった。智久氏から蔵書寄贈の相談も受けたが、熟慮すると能楽堂は取り壊されてしまったが新たに復興出来る、すなわち大西家が途絶えた訳ではない。礼久氏という立派な後継者がいらっしゃる限り、蔵書は能楽の家にとって一大事なものな

ので手放すべきではない。せめて私に蔵書解題目録を作成させていただきたいとお願いしたことである。家の歴史を証明するものは、やはり記録であり、書いたものの存在が大きい。伝統芸術の世界を継承してきた者が、つい最近までフシ記号すら非公開にしてきた例ひとつをとってもわかるであろう。世阿弥も秘すことが花であるといっている。それがプロ意識というものでもあった。

なお、蔵書目録とはいうものの大阪能楽会館に置かれていた本箱のもののみで、およそ290冊程度であることはお断りしておきたい。能楽師の家には、そのほかに能面・能装束・小道具・軸物等もあるが入れてはいない。一時、大西姓を名乗っていた閑雪の甥手塚亮太郎家のことも一括して考えなければなるまいが、これらは縁があれば更に別稿としたい。

3, 研究の方法

私が教わり培ってきた文献・書誌学・年譜考証の方法をとる。平成18～20年度の科研費研究成果報告書『新蔵生田文庫蔵書解題目録開解題』は簡易冊子で主要な機関に寄贈している(関大図書館のKOARA参照。但し、図書館での整理番号は一致していないので訂正を要す)が、入手し難ければ、拙著『続狂言史の基礎的研究』の「新生田文庫の能楽資料」にも一部紹介している。又、研究成果の一部ともなるが「能楽師大西家蔵近世以前写本目録」(『関西大学東西学術研究所創立70周年記念論文集』・2022年3月・関西大学東西学術研究所)でも既に報告しているので、それらの方法を踏襲している。大西閑雪は、その号のごとく生涯にわたって大曲「関寺小町」を三度も演じ、観世宗家から「雪」号を賜っているので、幸い『観世文庫所蔵能楽資料解題目録』(2021年1月・檜書店)や大阪で唯一発行されていた能楽専門雑誌『國諷(こくふう)』に掲載されていた閑雪・亮太郎の蔵書紹介記事を新たな知見として紹介することが出来た。

4, 研究成果

大阪能楽会館の調査に入ったころから関大の「なにわ大阪研究センター」で連載したものを『なにわ大阪の「笑い」に関する調査と研究』(2018年3月)にまとめて掲載したので、そちらも参照されたい。先述した「能楽師大西家蔵近世以前写本目録」は題名通り近世以前に限って報告したものである。その中で特記すべきは『拾葉抄』といわれる宴曲である。装丁からしても中世のものに間違いないと判断し、岡田三津子氏との共著で「資料紹介と翻刻 大西家所蔵 宴曲『拾葉抄』」として『大阪工業大学紀要』第63巻1号)に一部カラー写真を掲載し、インターネットでも公開した。故伊藤正義先生の「宴曲を読む会」に出席していたので、これは大変なものが残っていたものだと思感した次第である。

大西家所蔵で近代になってからのものはメモを含めた細かなものも含むので後回しにしていたが、大西家の歴史の中で五世閑雪の存在は想像以上に大きいものであった。特に大西家文書からだけではわからなかった『國諷』とのかかわりである。すなわち当該雑誌の現状を示せば法政大学能楽研究所鴻山文庫所蔵の『國諷』(1906年7月～1916年6月・編集者は実質的に創刊号から泉泰知・号秋花)の写真を研究所の御厚意で業者委託の撮影により欠本があるとはいえ全冊入手出来た。能楽の総合誌の最初は1902年7月の『能楽』で現在では復刻版もあり、研究者はよく利用しているが、『國諷』の存在は知られていてもユニークな存在として位置づけられるだ

けでほとんど顧みられることが少なかったために今は入手することさえ困難である。大西閑雪と甥の亮太郎の活躍ぶりは大阪で唯一発行された『國諷』に書かれているのではないかと見込んで何度か能研に赴き丁寧に読み始めていたのだが、紙質は極めて悪く特別に許可を得た。読み進めてみて『能楽』が東京中心の記事で占められるのに対して『國諷』からは近畿周辺の能楽師の活動が拾えた。

近刊「能楽師大西家盛衰記 『國諷』を中心にー」(『関西大学学術研究所紀要』第56輯)で触れることになるが、一番の成果は「『國諷』記述京観世屋敷の謡初について」(六麓会・2022年12月報告)である。世阿弥が將軍義満から拝領した槍とか糺(ただす)河原勸進能(1464年)の立て札が畳半畳あったという目撃談は研究者にとっても恐らく初耳となることであろう。又、「閑雪と 閑寺小町」では1909年4月3日の閑雪三度目の 閑寺小町 演能、京都での時、「舞の半ばで(シテの)衣裳が解けてしまつた話は名人にしては珍しい。更に「禁裏能の能組」は伝えられているが、実際に参加した演者の生の声はそれほどなく、大西閑雪の具体的な話は説得力がある。大阪博物場能楽堂の実態もよく書かれている。「閑雪・亮太郎を中心とした書籍」の解説も貴重である。『國諷』の記述の見直しは更なる次の研究への出発点となるであろう。

『関西大学学術研究所叢書』9号でも「大西閑雪筆『謡曲十五徳』」と題して紹介したことが、研究途上で閑雪自筆の掛軸が古書目録を通して入手することが出来た。資料は心に強く求める者のところに入ってくるとはよく耳にするが、その通りになった。

科研費研究課題を遂行する中で当初予想していなかったことも起きた。それは講演依頼であり、原稿依頼でもあった。但し、これらも同じ能楽研究の中に位置づけられることで許されることであろう。まず、西宮能楽研究会から「能「西宮」を謡おう！」の講演(2021年11月28日・廣田神社)を依頼されたことはうれしかった。以前、武庫川女子大につとめていた時、能楽師の故吉井順一氏から熱心に誘われ、復元の協力をしたことがある。主要メンバーの一人である子息基晴氏は大西智久氏と松華会を受け継がれているという御縁もある。『武庫川国文』91号からも依頼され原稿を寄せた。更に河添房江・皆川雅樹編『「唐物」とは何か』(2022年10月・勉誠社)から依頼され「[コラム]能・狂言と唐物 日明貿易と応永の外寇のはざま」にも廣田社蔵の「剣珠」の写真と共に掲載された。近代になって急速に衰退していた能楽を西洋のオペラだと見做してくれた能楽の恩人岩倉具視邸(六英堂)が西宮神社に移築されていたことや代々の宮司吉井氏の寄贈本が関大図書館にあることも今頃になって知ったことである。又、廣田神社は平安朝のころ歌合せで有名であったが、今後、和歌・連歌・俳句等の歌の拠点になってもらいたいと願うものである。

次に「北岸佑吉旧蔵能楽写真リストー「関西の戦後二十年」を中心にー」(『水門 言葉と歴史』・2021年11月・水門の会・勉誠社)に書いたのは北岸氏が朝日新聞記者という特権を活かされて撮影された珍しい写真を入手出来たきっかけからである。狙い通り大阪能楽会館で演能された写真も含まれていた。

残された課題と抱負

(1) 当初、予定していた研究課題の副題としての「茂山千五郎家と青家のかかわり」に

については締切には間に合わなかった。ただ、2022年9月23日に京都の金剛能楽堂で茂山狂言会があり、それは「八世久蔵没後二百年」と銘打たれた初めての催しでもあった。私は『続狂言史の基礎的研究』（2015年3月・関西大学出版部）でも「茂山久蔵英政と鏡氏青家」でも紹介したが、箕面市の青敬祐氏をお誘いし、後日、新しく14世千五郎氏になられた正邦氏宅で文化11年久蔵英政書写の『秘書』と一緒に拝見した。敬祐氏は奥書に「青」とあると大変感激されていらっしまった。いずれ改めてきちんと紹介したいと強く感じた一瞬でもあった。

(2) 豊崎宮の調査。「大西家所蔵番外曲 豊崎宮 等について」(『関西大学東西学術研究所紀要』52集)でも紹介したが、豊崎宮は大西家七代信久が戦時中、俳人入江来布に作詞を依頼した習作曲である。同神社は友田昇宮司もおっしゃられているように孝徳帝を唯一祀った神社でもある。

(3) 大蔵家文書の調査。大蔵家25世宗家弥右衛門氏からご連絡があり、神戸文学館で初公開された善竹弥五郎の日記を間近に見る機会を得たことを始めとして御縁の結びめはほどけてはいない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 13件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 関屋俊彦	4. 巻 275
2. 論文標題 [コラム]能・狂言と唐物－日明貿易と応永の外寇のはざま	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 「唐物」とは何か	6. 最初と最後の頁 95～100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 関屋俊彦	4. 巻 1
2. 論文標題 能楽師大西家蔵近世以前写本版本目録	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 関西大学東西学術研究所 創立70周年記念論文集	6. 最初と最後の頁 211～237
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 関屋俊彦	4. 巻 180号
2. 論文標題 北岸祐吉所蔵能楽写真	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪春秋	6. 最初と最後の頁 38～41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 関屋俊彦	4. 巻 1
2. 論文標題 「大西家所蔵狂言資料について」ほか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 なにわ大阪の「笑い」に関する調査と研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 13～24ほか
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関屋俊彦	4. 巻 91号
2. 論文標題 復曲能 西宮 再挑戦	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 武庫川国文	6. 最初と最後の頁 59-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関屋俊彦	4. 巻 49号
2. 論文標題 狂言 犬山伏 をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 紫明	6. 最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関屋俊彦	4. 巻 30号
2. 論文標題 北岸祐吉旧蔵能楽写真等リストー「関西の戦後二十年」を中心にー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 水門 言葉と歴史	6. 最初と最後の頁 167-182
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関屋俊彦	4. 巻 54
2. 論文標題 能楽師大西家年譜考証	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西大学 東西学術研究所紀要	6. 最初と最後の頁 323-344
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関屋俊彦	4. 巻 9号
2. 論文標題 大西閑雪筆『謡曲十五徳』について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 関西大学学術研究所研究叢書	6. 最初と最後の頁 19-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関屋俊彦	4. 巻 88号
2. 論文標題 大西閑雪と 関寺小町	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 武庫川国文	6. 最初と最後の頁 51-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関屋俊彦	4. 巻 291
2. 論文標題 講演記録：大西家能楽伝書解題目録構想に到るまで	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 月刊生活文化	6. 最初と最後の頁 2-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関屋俊彦・岡田三津子	4. 巻 63巻1号
2. 論文標題 資料紹介と翻刻 大西家所蔵 宴曲『拾葉抄』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Memories of Osaka Institute of Technology	6. 最初と最後の頁 38～56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 関屋俊彦	4. 巻 43号
2. 論文標題 竜と能楽	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 紫明	6. 最初と最後の頁 36～39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関屋俊彦	4. 巻 52輯
2. 論文標題 大西家所蔵番外曲 豊崎宮 等について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 関西大学東西学術研究所紀要	6. 最初と最後の頁 73～81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 関屋俊彦
2. 発表標題 『國諷』記述京観世屋敷の謡初について
3. 学会等名 六麓会 (オンライン)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 関屋俊彦
2. 発表標題 復曲能 西宮 再挑戦
3. 学会等名 能「西宮」を謡おう！実行委員会・廣田神社 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 関屋俊彦
2. 発表標題 『國調』の意義～能楽師大西家の記事を中心に～
3. 学会等名 第九回 東西学術研究所 研究例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 関屋俊彦
2. 発表標題 能楽師大西家年譜考証
3. 学会等名 東西学術研究所第17回研究例会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 関屋俊彦
2. 発表標題 大西閑雪『謡曲十五徳』補遺
3. 学会等名 六麓会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 関屋俊彦
2. 発表標題 北岸佑吉旧蔵写真について
3. 学会等名 水門の会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 関屋俊彦
2. 発表標題 新架蔵能楽資料二題
3. 学会等名 六麓会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 関屋俊彦
2. 発表標題 大西家所蔵解題目録作成に向けて
3. 学会等名 六麓会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 関屋俊彦
2. 発表標題 大西家能楽蔵書解題目録作成の構想
3. 学会等名 東西学術研究所第6回研究例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 関屋俊彦
2. 発表標題 大西家能楽蔵書解題目録構想に至るまで
3. 学会等名 第1回生活文化サロン・生活文化研究所
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 関屋俊彦
2. 発表標題 大西閑雪追福菩提寺碑と高野山増福院
3. 学会等名 六麓会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

資料紹介と翻刻 大西家所蔵 宴曲『拾葉抄』 http://id.nii.ac.jp/1360/00000242/
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------